

レファレンスコーナー -- チベット問題について考える (ブックシェルフ)

| | |
|-----|--|
| 著者 | 澤田 裕子 |
| 権利 | Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp |
| 雑誌名 | アジ研ワールド・トレンド |
| 巻 | 164 |
| 発行年 | 2009-05 |
| 出版者 | 日本貿易振興機構アジア経済研究所 |
| URL | http://hdl.handle.net/2344/00004765 |

レファレンス

コーナー

チベット問題について考える

澤田裕子

二〇〇八年三月にチベット自治区で起こった暴動を中国当局が武力制圧したことで、同年八月の北京オリンピックの聖火リレーが妨害されるなど、チベット独立を支援する抗議やデモが各国で行われた。本稿では歴史的、政治的に複雑なチベット問題を考える際の視点のいくつかを最近の出版物から紹介する。

まず、チベットの基本的な情報を得るのに石濱裕美子編『チベットを知るための五〇章』（明石書店二〇〇四年）がある。写真や地図を多用して「伝統的なチベット世界の歴史をチベット人の信じるがままに紹介」し、チベット仏教や生活、直面している問題等を解説している。また、チベット亡命政府の国家元首であるダライ・ラマ一四世の考えを理解するのに、ダライ・ラマ一四世著（北川知子訳）『ダライ・ラマ一平和のために今ができること』（ダイヤモンド社 二〇〇八年）がある。二〇〇八年三月の暴動後に発表されたものを含む一九八四年以降のスピーチ八件を翻訳している。中国とチベットのこれまでの歴史について

は、それを論じる者の立場によって解釈が異なっている。ここではチベット人の立場で書かれた資料を二点紹介する。ペマ・ギャルポ著『日本人が知らなかったチベットの真実』（海竜社 二〇〇八年）は、チベットで生まれ、ダライ・ラマ一四世に従いインドへ亡命後、難民キャンプで少年期を過ごし、現在は日本で大学教授を務める著者がチベット問題の入門書として著したものである。また、マイケル・ダナム著（山際素男訳）『中国はいかにチベットを侵略したか』（講談社インターナショナル 二〇〇六年）は、作家であり写真家でもある米国人著者が七年間かけてチベット人にインタビューした内容をまとめた記録である。

次に、チベット問題を中国の少数民族問題としてとらえた資料をいくつか紹介する。まず、大西広著『チベット問題とは何か―「現場」からの中国少数民族問題―』（かもがわ出版 二〇〇八年）は、中国経済を専門とする著者が、新疆大学の客員教授を務めた際に経験した少数民族と漢民族間の矛盾、対立に注目して書いている。中国の少数民族自治区は中央から財政補助を受け、さらに少数民族個人への優遇措置もある。反面、そういう優遇策を多くの漢族が快く思っていないことを挙げ、現存する漢族と少数民族間の社会矛盾の解決が必要だと指摘する。また、社会矛盾の原因は経済上の地位の問題であるとして、チベット族も近代

的産業に就き、経済的利益を獲得することを提案している。さらに、少数民族政策を多言語教育の観点から論じた資料に、岡本雅享著『中国の少数民族教育と言語政策』（社会評論社 二〇〇八年）がある。まず、中国が公認する五五の少数民族に対する教育の概要を述べ、次に各民族が自らの言語や文化を維持するために行う民族教育の実状を報告している。チベット自治区、青海省、四川省、雲南省、甘粛省に分かれて住むチベット族については、チベット語の地理的区分や教育の歴史的、社会的背景を説明し、行政区が違うことで言語や教育状況がどう異なるかを分析している。ただし、不明な点が多く、現地の実態はつかめていないと自ら指摘する。また、全体として中国の少数民族政策に一貫性がないのは、個人の民族的アイデンティティや民族語の尊重を支える普遍的理念が根底にないことが原因だとしている。本書は一九九九年に出版された同タイトルの増補改訂版で、索引や図表一覧が加わっている。また、民族問題を国家概念との関わりで論じた資料に、王柯著『二〇世紀中国の国家建設と「民族」』（東京大学出版会 二〇〇六年）がある。二〇世紀の中国において、「民族」が新しい国家構想と近代国家建設の過程でどのように位置づけられたかを論じている。少数民族政策については、

多様な思想が複雑に絡み合い、時期によって強調する部分が違ったため

に一貫性に欠け、少数民族のどちらにも揺れが生じたと分析している。一九九〇年代以降、中国政府が「少数民族」より「国民」を強調する政策に転換したのは、国内政治と社会が揺れるなか、国際環境や国際秩序も変容し、国内の民族問題が厳しくなったためとしている。最後に、加々美光行著『中国の民族問題―危機の本質』（岩波現代文庫 二〇〇八年）は、民族問題を特に非国家主体との関わりにおいて考察している。今回のチベットでの暴動は、マスメディアやNGO等、国境を越えた非国家主体の働きによって国際化したと指摘している。一九九〇年代半ば以後、国際情勢の変化を反映し、中国政府は地政学的な外交政策と安全保障戦略を採用するようになったが、非国家主体の力量は十分に把握し得なかつたとみている。国家支配の枠に組み込まれない民意が世界的に影響力を強める一方で、一党独裁の中国では「国家と社会」の分離が政治システムとして進展していないため、民意を汲んで問題を解決するという対応がなし得ないのだと分析する。チベット問題は中国の政治民主化の課題でもあると結ぶ。本書は、同著者「知られざる祈り―中国の民族問題」（新評社 一九九二年）を再編集したもので、チベットをめぐる情勢の新たな展開を受け、大幅に論考を加えている。

（さわだ ゆうこ／アジア経済研究所図書館）